

今月の
いいね!

あら・アラ・鯨



アラ

【名前】

アラ（スズキ目ハタ科）

【すむ場所】

北海道、青森～九州の太平洋と日本海。瀬戸内海。
水深 70～360mの砂底や岩礁。

【大きさ】

大きくなると全長 1m 以上になる

【当館で見られる場所】

駿河湾の生きもの

【特ちょう】

口は長く伸び、えらにある鋭いトゲがある。若い魚には黒いしま模様があるが、成魚になるにつれて消えていく。味が良く、高級魚として知られる。

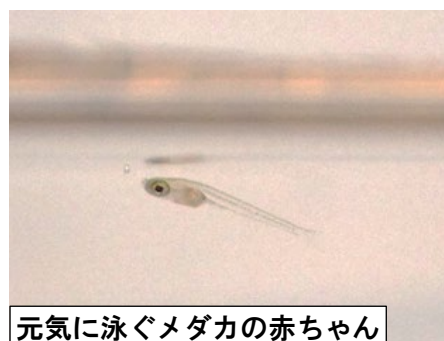
【担当学芸員から一言】

当館周辺では、アマダイ釣りの外道として、たまに顔を見ますが、展示個体も釣りで採集した個体です。このサイズの若魚は、釣り人の間で「コアラ」などと呼ばれて親しまれています。(K.Y)

トピック

展示場デビューを目指して

自然史博物館では静岡県に生息する絶滅の危険がある淡水魚としてミナミメダカを展示しています。そのため、皆さんに公開している展示場以外でもひっそりと予備飼育をしています。そのバックヤードの水槽では今年も産卵が始まりました。メダカは育てやすい魚ではありますが、生まれたばかりの赤ちゃんは小さくて弱々しい姿をしています。飼育については、初めの数週間が一番大変な時期ですが、小さな口で一瞬懸命エサを食べ、着々と育ってきています。まだまだ小さな体ですが、見た目はだいぶメダカらしくなってきました。展示場デビューする日が待ち遠しいです。(Y.O)



元気に泳ぐメダカの赤ちゃん

現代のクジラ骨格と化石を比べる！



全身骨格標本



鼻の位置の撮影

当館では、2階展示場マリンサイエンスホールの中央にピグミーシロナガスクジラの全身骨格標本を展示しています。この標本は1966年に特別な許可を得て採取されたオスのクジラで、全長18.6メートル、体重43トンもありました。全身の骨格が揃っているのは非常に珍しく、日本では当館の標本のみです。骨の重さだけで3.5トンになる非常に大きな標本です。

今回、大阪市立自然史博物館の方からピグミーシロナガスクジラの頭の部分を測定したいという依頼がありました。当然博物館同士として協力させていただくことになりました。実は大阪のある場所でクジラの化石が発見されたのですが、頭の骨は砕けていてどのクジラの仲間かが分からないとのこと（未発表）。ただ耳の骨（耳骨）はしっかりした形を保ったまま化石になっているので、ピグミーシロナガスクジラのものと比較したいということでした。またクジラの仲間は頭の上側にある鼻の穴の位置や形が種類の特ちょうになるので、その位置も比較するため記録しました。

耳骨は頭の骨に納まっており、外すことはできませんが今回の化石では頭の骨が割れてきれいに外れていました。しかし、ピグミーシロナガスクジラの耳骨は外側からは見ることはできません。細長い鏡を入れ、耳骨の特徴を比べました。この比較調査で得られた情報から大阪で見つかったクジラ化石の種類が分かると嬉しいですね。このように標本には様々な情報が詰まっており、そこからまた新しい発見が生まれるのです。（S.T）

スケスケ！？スカシテンジクダイ

ダイビングや釣りをしたことがある人は聞き覚えがあると思いますが、海底は決して一様に平らではなく、ところどころに“根”と呼ばれる大きな岩やサンゴなどで作られた小山があります。こうした“根”の周辺では、小魚たちが時に数千、数万の大きな群れを作ることがありますが、スカシテンジクダイもそうした魚の1種です。

スカシテンジクダイは、主に和歌山県以南のインド・西太平洋域のサンゴ礁や内湾の岩礁にすんでいます。体長は2-5cmほどで小型の甲殻類や動物プランクトンを食べるため、当館ではカイアシの仲間などの動物プランクトンを餌として与えています。

スカシテンジクダイの1番の特ちょうは、その名の通り体が透けている点です。体の背中側と腹側の後半部が半透明に透けており、はっきりと骨の形まで観察することができます。体が透けている理由としては、天敵の眼をあざむくためとの説もありますが、詳しくは分かっていません。また、海中のスカシテンジクダイの群れに太陽の光が当たると、透明な体に反射することでキラキラと群れ全体が輝き、とてもきれいです。そうした様子からか、英語では Luminous cardinalfish（明るく光るテンジクダイの仲間）と呼ばれています。これから暑い季節がやってきますが、スカシテンジクダイの半透明の涼しげな体をぜひゆっくりと観察してみてください。（S.A）



スカシテンジクダイ



群れるスカシテンジクダイ

※生物の状況により展示を急遽中止する場合があります。予めご了承ください。